

月間續けて御前に伺候した努力によるのであります何事も今日も明日も一歩一歩進まなければならぬ歐州戦争で成金が多く出来たが成金若干のものは濡手に粟努力に依らずして得たものがありますそれが健全なる農村青年に及ばず害悪は甚だ大である此の物質上の成金につれて精神上の成金が出来た心の中に一束飛に偉らくならふと云ふ者をもつものがある一束飛によいものにならふと云ふ者は心の底に自覺せぬ所に出来てゐる靜座法をやつて氣を落ちつける云ふのはよいが偉らくあつた様に思ふのが都會の青年にも學生の間にも多い之物質界の成金の精神界に及ばしたものであつて必ず一歩一歩修養せねばならぬ曾參が身体を大切にして孝子と云ふ名を得しも孔子が聖人の名を得しも皆不斷的修養である一身の修養に於ても一家の經營に於ても一村の經營に於ても皆同様で修養には速成法はない一生進通してやらなければならぬ日露戦争の後に於て「五ヶ年間勤儉」と云ふ事をよく耳にしたが戦後はやるが平素はせんではいかぬそれでは不斷でない何事も不斷の努力を以て大に格闘すべきである時に當梅園先生は三十一才の時玄語を始め二十幾年間かゝつて大著述をされた之は梅園先生の不斷の努力の賜であると思ひます（終）

●梅園先生の訓を読んで感じたこと

生田師範學校主事

日本の大學者梅園三浦先生の百三十年祭を舉行するに當つて此の席に列するを得たことは私の身に取つて至上の光榮と思ひます安岐に來て此の川上には梅園先生の親まれた山川があると思つて愉快な様なつかしい様な感じがしました道にて梅園先生の訓を守らるゝ人々が禮をする様や納税成績のよい生徒の長くおとなしい事すつかり感心して仕舞ひました感心した人にお爲めになるお話をしようとは思ひませぬが梅園先生の著書を読んで私自身が感じを一つ二つをお話しませう

梅園先生の著書中に怒の道の「説」といふことがありますが私は生れつき癪癪で損をしたことが段々あります怒つて儲けたことがありません徳川家康にも「堪忍は無事長久の基」といふことがありますが身をほろぼすほどにはおこらんでも損をすることは多い其の内でも最も損をした人は赤穂の殿様である私の友人に難を買つた人がある卵を産まないといふて怒つて打殺しましたらして貳圓五拾錢損をしました一寸した事に怒つて家内中が皆佛頂面して心には恢復の機を見つける様なことがありますどうしたならば怒らんで済む様になるかといふに先づ度量を大きくすること量見を廣くするといふことであります或る所に元日早々妻が鉢を割りました所が主人が今年はいよいよ八割の配當金があると喜んだといふことがありますが之は事實談ですが或る人が臺灣へ出稼に行く客をお別れに招いた時奥さんが飯櫃を倒かしました主人「米に離るゝ」といふ様な心地のして居る客を見て歌を作りました

浪人の身のことさらにうれしきは

召しかへさるゝ時にぞありける

客の機嫌もなほつたといふことであります之等のことは心に餘裕があつてこそ出来るので不斷より心得ることであります家内中が圓滿に暮すのには家の中心になる者が此の心掛がなければなりません心のゆとりをつけるのには醫者では直りません昔から「腹の立つてゐる時は物言ふ前に十數へよ」といふことがあります西郷にも「怒れば十五分こらへよ」といふことがある古歌に「急がずば濡れざらましを旅人の後より晴るゝ野路の村雨」喧嘩はなる可く延期するがよい夫れから怒らぬ様にするには自分を知らねばならん妻の顔の醜をどがむる前に先づ自分の顔を見らねばならん心の事も同じ事である七人家内でも皆が自分をへり下れば睦じいが三人家内でも皆が偉ぶると不和になる人を悪くしようと思ふのは悪い人も自分も正しく見へたらよいと思ひます其の外怒をせぬ様にするには堪忍した話を聞くのもよい神崎與五郎の訛証文の話御釋迦様が婆羅門僧に恥しめられた時の態度など聞くのはやがて腹を立てぬことになりす序に私は子供に教育に携はつて居るものですから父兄が子供を叱ることにについて一言し度いと思ひます子供を叱るのを分て見ると仇打に叱るのと末よかれと思ふ親の心から叱るのとあります世の親の子供を叱るのを見ますと物を割られたとかこがされたとかで腹立まざれに叱ることが半分位はあゝと思ひます打たれても叱られてもたよつて来る子供は誠に憫れではありませんか子供に對す

る怒も慎まねばあらんと思ひます (終り)

● 神といふこと

系永大分皇典講究分所長

神様に對して私が齋主をする心得を吐露して各位御教示を戴き度い。

抑々神と申し上げるものが、如何なる方あるや、我國では八百萬神といつて多くあります、此豐後豊前の人々が多く信仰するのは、八幡様と天神様とであります。八幡様の祭神は、人皇第十五代應神天皇様で、天神様は菅原道真公である。應神天皇も菅公も共に最初は人であられたのが肉体なくなり靈魂が神となられたのであります。して見れば今日お祭せるは三浦先生の靈魂である。又明日招魂還魂せんとする軍人諸氏に於て近くは靈魂にして遠く神となるのであります。

神はあるものか。我等が神とするのか。といふ二説あるが私は彼れに神様が御座ると決定してあります。學校にてよくある畫像の和氣清磨公は、稱徳天皇の御代、宇佐に使して御神勅を受けられた。其御神勅は書物によくある「我國開關以來君臣の分定まりぬ。臣を以て君となること未だ之あらざるなり。天津日嗣は必ず皇緒を立よ。無道の人はいさしく速に除くべし」と。而して此の神勅を奏上して弓削道鏡の災を拂ひ、我が萬世一系の皇統の素れしめざりしは、諸氏の知れる所である。

清磨は神といふものを、自ら作りて天皇をいつはりしか。實際に神といふものがありしか。といふに清磨は我獨り「天地に恥ぢず」といへり。清磨は決して偽りをいつたのではない。彼れは彼所に神ありと確信してゐたのである。之れが我々の常に崇拜してゐる我が皇室に對する第一等者である。其清磨は千年の昔、神は彼れにましますお方なり。といはれしかりであるから。日本臣民は皆信仰せねばならない。招魂してお祭りをするのは、魂があるのをお招きして我々が謹みて誠を靈に致すのであります（をばり）

●自慢の種のよしあし

福岡修猷館中學教諭 古庄榮治氏

人は誰でも何か自慢の種を持たぬと濟ぬものゝようである。

誰は字が上手とか何所の花嫁は衣裳持であるとか、拙者は貧乏ではあるが出す金は人に後れず出すとか、此の村には雷が落ちぬとか云ふて自慢したり人を羨んだりするものである。

自慢する事が善いか惡いか。羨むのがよいかは別として人は自慢するならばその種をよく選ばねばならぬ、又人を羨むのもその羨むのをよく定めぬとわるい。

花嫁の褒められるのが只衣裳持ちと云ふばかりから餘程考へねばなるまい。その村に雷が落ちぬと自慢した所でその村の人の力で落ちぬ様にしたのならば自慢にならぬが。そうでないとき

は嬉ぶのはよいが自慢にはならぬ。相模の勝敗に無理な物云ひを附けて敗けた力士を勝にした所で少しも名譽でないどころか高い目から見ると大きな恥である。議員の選舉騒ぎも之と同じ事が多い。斯様な譯で人と云ふものは自慢したり人を羨むたりするならばよくその種を選びわけねばならぬ。

三浦梅園先生は如何なる人として人に敬はれ如何なる事で世の中に自然々々に名前が高まつたのであるか、此の先生ならば御手本として決して人々にわるい癖は出來ぬ、此の立派な御手本を持つ居る西武藏なら大分縣ならば名譽である。

今福岡市に共進會があつて居る各縣の出品が澤山ある大分縣は近來中々進歩しつつあるがまだ一般の共進會では幅はきかぬ。而し大分縣は昔から色々立派な學者が澤山出て居る今後大分縣から石炭や鐵等が澤山出る様の事はあるまいがそれは仕方なしとして大分縣は澤山の人物を出す様に務むるがよいと思ふ、大分縣は學者や政治家では福岡縣等にうなに負けぬ又まけぬ様にせねばならぬ。

丁度梅園先生と同じ時に福岡に龜井南溟先生と云ふ名高い學者があつた。此の南溟先生の親仁様は福岡市の四里程西の方の田舎の百姓の家に生れ二十三年で百姓をして居たのでその百姓家には引續きて南溟先生と同じ血統の人が二三年前まで住んでゐたのであるが何か財産の都合がよくないので今は何所かの炭坑に稼ぎに出て居るうであるが龜井南溟先生の親仁様は二十三才

迄日々破衣を着て鉄鎌を持て百姓をして居つた然るにその人の屋敷のすぐ東側に高祖山と云ふ小山があるその山上に高祖城と云ふ城の跡がある此の城は今から七百年程前戦國時代と云ふ頃に原田氏と云ふが城を構へて居た所で龜井先生の先祖は原田氏の家老格であつた然るに此の原田氏の城は後秀吉に攻め落されたので自然龜井先生の先祖も世が變り百姓をするに至つたのである南溟先生の親仁様は百姓仕事しながら目の前に此の城跡を眺め先祖が世に時めいたのを自分の今の身に思ひ比べして居つたある日仕事を終り屋敷内の小池で鉄を洗ふときに自分の見すばらしき姿が池の水に映らたのを見て此は先祖に恥かしいと考へて何とかして學問しやうと福岡の醫者の家に下男の様になつて住込みうれから弟子とちり勉強してこうく一人前の醫者になつて開業して後夫婦の間に男の子が出来たなら先祖に對し恥かしくないものに育てたいと思ひ男子の産れる様に箱崎八幡様に願をかけて後男子が産れたのが南溟先生である。南溟先生の親父様は斯様に二十三才のとき祖先の關系した城跡を見て奮發し百姓をやめて書生となり立派な醫者となり祖先の事を考へてその子南溟先生を作りあげたのである。西武藏の人々は日々梅園先生の御墓の森や御屋敷を目の前に見るのである。ところか皆様が急にも緩々にも百姓を罷められては大變で又必要はないが梅園先生を心の鑑とされたいものと考へます。

梅園先生を御手本として梅園先生に寄似るのを自慢とし梅園先生あるが爲め村の人々が益々其

くなることを云ふ自慢する様になるのは決して種の惡ひ自慢ではないと思ひます。(梅園先生と南溟先生とは知合の仲でありました。)

(寄稿)

● 三浦梅園先生の嘉遯

第七高等學校教授 文學士 武藤長平氏

梅園先生は其全生涯を通じて祿仕することなく處士を以て始終せられたことは先生が高潔なる一代を送られた主なる理由の一でないかと思ふ。かの福澤諭吉先生が「福翁百話」中に所謂「獨立自尊」といふことを力説せられたが是は實に人生に缺くべからざる實質で健全なる教訓である梅園先生が王侯の懇望を斥け深く山野に棲遲して功名の念を絶ち形勢の途に奔走することなく堅固に心身の獨立自尊を保持されたのは先生の傳記を書く人の持筆大書すべき點であると思ふ。

山林に退耕して心身の獨立自尊を持することは元より難事ではあるが退隱しても世を勘ねないで素直にかだやかに一閑人として代を送り且又寸陰を惜みて研鑽修養して先人未發の學說を發表することは尙一層難事である、此點に於て梅園先生は本邦儒林中の俊傑である。

伊藤仁齋先生も王侯の禮聘を辭して専心研究と育英とに一生を獻げた碩學であつて其品格ある學者として今日に至るまで聲譽藉甚である仁齋先生は京都に論陣を張つたから自然其聲望は當

時の日本に響き渡つたのである、わが梅園先生は鎮西南豊の山中に隠居して其名聲を馳するところを勉められなかつたから其學業の功績は早く知られ渡らなかつたが泰西文明東漸の後却つて其の評判が揚つて來た。

一代に屈して千載に伸ぶる梅園先生の高風は欣慕すべきではなからうか。

(附録)

三浦梅園先生と帆足萬里

第七高等學校教授 文學士 武藤長平氏 (述)

江戸時代は文藝復興時代なり、暗澹たる室町戰國兩時代の密雲漸く離散し平和の曙光輝々として大地に照り殺伐の余習正に脱し文教靡然として四境に遍く漢土の儒學詞藝此に其華を抜き其秀を鍾め我が近世文學は萌芽を發し、戯曲、小説、國雅、俳諧、諸藝此に勃然として發興し來たる此際に於ける儒者の位置は正に文教の指導にして道德の權威なりき、林家は羅山以來江戸官學の督者にして累世聖堂に講學し天下の英雋を聚ひ歷代亦た俊秀なきに非ず。

三百諸侯又た上の爲すがまゝを奉じ崇儒敬文藩校の建設儒學の獎勵相互に後れざらんことを期す。然り而して當時の習慣は儒學を以て治國平天下の道となし儒者を以て政治學者となせしを以て儒學は武士階級思想を司配するものにして武士は其の登龍門を修學に求めたり、宜べし

るかな儒學の隆昌の極に達し咄咄の唱和四境に及びしことや。

夫れ儒學は治國平天下の道にして其の教ゆるところは政治經濟文學の諸方面に達したり、江戸時代の儒者は皆な政治經濟學者を以て自任し、其の著書の説くところ經世濟民に渡らざるなし、新井白石然り、荻生徂徠然り、熊澤蕃山然り、太宰春臺然り、賴山陽然り、彼等皆な其の經世論を發表し或は諸侯の顧問となり或は王侯の師を以て自任す、然り而して幾多の小白石、小徂徠、小蕃山、小春臺、小山陽は三百諸侯の藩國に滿ちたり、彼等の諸説は一般に支那の輸入説にして多くは支那學說の翻案に過ぎず、故に其の經濟説は農本主義、封建維持策にして幾多の著述講説此の範疇を出でず。

寛政前後よりして漢土の詞藝漸く盛に詩に文に願人黒客の弄ぶところとなる然り而して其の作爲するところの詩文亦た漫に漢土詩人文士の糟粕を嘗むるに過ぎず、白石、南郭、玉山、蛻巖蘭亭等の傑作唐詩の模倣に過ぎず、徂徠、宕陰、拙堂等の名文唐宋八家の響に倣ふのみ、異邦人として漢詩漢文の模倣に巧なりといふを得んも之を漢土の大家に比す豈同日の論ならんや。思想理義は或は學びて出藍の譽もあらん、文藝上に於て如何んぞ作物の本土大家を凌ぐものあるを得んや然るに江戸時代を通じて彼土學術詞藝の一切を倣ひて其の範疇を脱せず、一に其の響に倣はんことを以て究竟の目的となせり。

二

されば漢土とは之を見聞するの遅れざらんことを期し崎陽に留學して唐人に接し彼が筆談に堪ゆるあるものに遭へば喜んで詩文の唱和をなしたりて郷黨に誇示す、此に於てかこの一港津は猫額的小地域を以て當時日本唯一の要津として西陲に儼存す、従つて東隣の佐賀藩、北邊の平戸藩はいふに及ばず、福岡、熊本、薩摩等の他鎮西の列藩皆その影響を受け鎮西諸藩の文教遙に上國を凌ぐものあり然り而してこの鎮西諸藩中特に南豊七藩は他の列藩に比して領土小ありと雖、文教の優勢なる決して他の下に附かず、或は經學治平に或は文學詞藝に一種の特色を帶ぶ、梅園、愚山、萬里の思想研究に於ける淡窓一門の詩文鍊磨に於ける竹田一派の南畫趣味に於ける郁々乎として南豊の誇なり、就中梅園と萬里とは實に南豊の天傑地靈なり。

梅園萬里の事蹟に關しては天四西村氏嘗て之を大阪朝日新聞紙上に掲載し大に先哲の遺業を顯彰したり、氏は先年親しく二子山下に梅園の遺族を訪ひ、日出灣頭に萬里の瑩城を弔し、その遺墨を展し、故老耆宿に質し細大漏さず之を精査討究したり、然り而して今や「學界の偉人」てふ大著述となり、其書天下に布けり、されば今に及んで二大碩儒に關しては余が喟々を要せざるものと如し、されど余も亦た一昨春正月二日雨雪を冒して二子山麓に梅園の遺宅を訪ひ、文庫に遺書を展し往年梅園が起臥せし一室に逗留すること三日、又た日出の古驛に日出文庫の文書を觀、松屋寺畔萬里の墳墓を展し、耆宿麻生貞樹翁に質すに萬里の遺事を以てし更に中津に帆足恒雄氏を訪ひ萬里の遺墨を受く、吾人豈にこの両先生の遺徳を頌せずして可ならんや、その天

四氏の大著に對して蛇足たるは自ら知るところのみ。

三

近時梅園の聲大に揚れり、河上博士先づその著「原價」を紹介して、その經濟學者たるを顯彰せり、次で福田博士之を英の經濟學者アダム・スミスに比し、「原價」と「富國論」を對比し而かもその先倡たるを推稱す、而して「梅園全集」の梅園會より發刊せらるるや、藤井學士之をデカルトに比し之をカントに配す、近時小柳學習院教授梅園の哲學を論じて之を哲學雜誌に掲ぐ、爾來南豊の地はいふに及ばず天下之を知らざるに論なく皆なるの稀有の大家たることに同す、吾人淺學不才今之をデカルト、カント等の先哲に比し、之をアダム・スミス等の學士に對せしめて其學識を驗する能はずと雖、其の人格學識教化事業等に對して意見なきに非ず、諸ふ之を述べん。

萬里全集は未だ公刊されずと雖、麻生翁により今やその緒に就けり、公刊の日將に近きにあるなるべし、又先年宇野學士西村天四氏と共にその表彰會に臨みてその著書を評論したり、且つ近時雜誌「東亞研究」誌上にその思想著作を批評す、かく二先生の事蹟を紹介し論評するもの相續ぎて出づるは實に學界の慶事なり。

夫れ梅園南豊二山下に生れ學溪の水を汲み、多く師を需めず多く友と交らず侯伯の禮聘を退け「朝に孖溪の水を飲み、夕に孖山の雲に臥し」て自ら足れりとなせり、靜修讀書以て六十有七歳

の高齡を得て靜に开山下に眠れり、その疾の病きや二兄に示さんて作りたる詩あり曰く

昇平長足養無能、高枕山雲遶座層、愛品紫荊華樹好、忘吾蒼鬚雪霜增、
清壇頗類松間鶴、閑夢猶類風裏燈、自古龍門波浪惡、不須辛苦曝頭登、
と又た以てその「洞仙」の雅號にうひかざる高風を偲ぶを得ん。

梅園の世に處するや浮誇術學の弊を退け功名虛禮の煩を避け、只管その品位貞節を自恃するに
励めたり、その禮聘を退け仕官を避けたるもの一に志の專修向上に切なりしによる、その世と
絶ち學に力めたる宛然縮流學徒の如し、その久留米侯の聘を辞したる詩

樵溪不與世間通、高臥東山異謝公、占得烟霞吾已老、清風鶴唳白雲中、

も亦た「病示二子」の一篇と同工異曲なり。

四

夫儒者は縮流に非ず、儒學の本領は治國平天下に在り、何んぞ仕官を恥とせんや、徳川時代の
儒者出で天下にその經綸を施さんとしたるもの少なからず、白石然り、徂徠然り、栗山然り
精里然り二州も亦た然り、以上は江戸の本場の名のり出でたるもの、その諸侯に禮聘され藩治
領政に參與し善政流風を後に垂れたるもの頗る多し、平洲の鷹山公を得て名聲今に及んで益々
盛なる、蕃山の芳烈公を得て、大名一時に鳴りしが如き必ずしも厭ふべきに非ず、否な大に之
を奨めて可あり。

かの仁齋が肥後侯千石の聘を辞して修學育英に專なる東涯の父志を繼ぎたる山陽の脱藩して
の大志を京都に成就し得たると共に藩政の小を避けて救世の大に就けるもの取捨やずしも誤れ
るに非ず、京都は皇居のあるところ山河の固、旬服の便將に天下に呼號せんとするもの登り
て利ある高處なり、されば仁齋東涯のこと、之を梅園の西陲南豐の山村に一生を終れると比す
べきに非ず、之を以て梅園の退耕と並ぶべきに非ず、吾人を以て之を見れば梅園の二子、山下
にその生を送れるは藤樹の湖西小川村に耕せると正に符を合するが如し、藤樹の壽は長からず
齡四十一を以て世を捨つ學も亦深からず、博からず餘姚を主として洛閩を兼ねたりと雖、その
大著の後世に垂るべきなくその學識當時に轟きしを聞かず、唯に其徳行の篤き資性の醇なる人
をして敬慕措く能はざらむ、この一美事あり、その門に大才蕃山を出すに至る。

梅園の醇正篤實正に藤樹に劣らず、その郷黨の感化に心を碎きたるその門弟の教養に意を注ぎ

たる亂りに功名に熱せずして聲譽自ら至れる、深く蹈晦して却つて崇拜者多き「近江聖人」の

名當時に鳴れる、「豊後聖人」の稱今代に盛なる正に相似たり、嗚呼二聖共にその言は法とすべ

くその行は則と爲すべし、

藤樹に大著の後世に傳ふべきなきは梅園の良著等身なるに比すべくも非ず、惟ふに梅園は藤樹
に優るあるも劣るものあるを見ず、梅園は退耕を好み、山林を愛し甚だ退要的なる如きも、その
の研究心の旺盛なるその學問的良心の健全なる決して一隱者に非ず、その幼時近江八景の屏風

畫を觀て疑問を起したる、その青年にして天球儀を製出したる、而立を超へて「三語」の大著に着手せる知命に及んで「原價」の著ある共に大疑を天地萬物に挿めるに因る蓋し梅園は天地を以て研究の書齋となし萬物を以て研究の對象となす、區々たる藩政國治の關與するところに非ざるなり、梅園の抱負必ずや「奚んぞ其れ政を爲すを爲んや」といふにあらん。

その學必ずしも獨創に非ずその師綾部綱齊、藤田敬所、その益友麻田剛立に得るところ決して小少に非らざるべし、就中綱齊、剛立に得るところ頗る大なり、その天文に關する思想は之を剛立に得、その哲學に對する啓發は之を綱齊に得たり。

夫れ條理學あるものはその説くところ深遠にして玄語十餘萬言微に入り細を穿ち深奥なる玄理の解説を試みたるもの容易にその堂に升ること能はずと雖その門を窺へばその所説支那哲學の理に基因するところ少からず、世に之を以て遠西哲理の影響ありとなすは誤れりといふべし。贅語、敢語と併せて梅園三語といふ、梅園學問の本領此に在り蓋し畢生の精力を此に注ぎたり梅園の三語を著すや前後三十八回之を改削したりといふ何んぞその著述に忠なるや、かくてこそ其著後世に垂るゝことを得ん。

五

梅園の弟子に帆足萬里あるは藤樹門下に熊澤蕃山あるが如し、共にその先師を辱めずと雖、やゝその學風に於て正統を得ざるものあるは相似たり、梅園、藤樹共に足郷園の外に出でずひたす

ら清節を守り所信を操れり、蕃山が所謂「三尺の泉は三軍の渴をやむるに足れり」といへるが如くその貞風高節天下風教の指導たるに足る梅園の條理學にその深遠なる學理を語ると共に學識必ずしも狹隘ならざるはかの藤樹が「博學の聞なければも聖學興起の端をひらける」と同じからざれども、その似たるところあるあり、蕃山萬里の學風は寧ろ廣汎博大なるものあり蕃山は所謂陽明學者に非ず、その説くところ儒流に抱泥せず、神儒佛を出でゝ自ら一旗幟を擧げその大志は治國平天下に在り、萬里の學は和漢洋に渡り儒流を超へて一生面を開きその博識は天文窮理に及べり、而して二儒共に時の藩政に參與し共に志を時務に絶てり、蕃山は軟弱不遇に終り萬里は隱居放談に遁れたり、二儒相似たるなきに非ず、されど蕃山の門戸雀羅を張るは萬里の門葉甚だ繁茂せるに比すべくも非ず、萬里の疆域博覽兼ぬるに經世の抱負あるは信州の先覺佐久間象山に比すべし而して自ら任すること高く容易に他の下に就くを甘んぜざりし態度も亦た髣髴たり、夫れ象山の學は世に余姚を奉ずといふと雖、實は然らずその一代の抱負正に「予年二十以後乃知匹夫有繫一國、三十以後乃知有繫天下、四十以後乃知有繫五世界」といふ放言に歸すべし。

吉宗將軍が外典講讀の禁を解くや秀才の洋學研究に指を染むるもの亦た少なからず、是れ蓋し自然の趨勢なり。

吾が萬里、象山が開拓の餘地をこの方面に求めたる亦た事の自然に出ず、夫れ此の二儒なるも

のうの抱負の大なる氣焰の高き共に容易に其比を當時に見るべからず、夫れ高く標置するものは必ず蘊蓄の豐贍なるを力めざるべからず、温古知新の兼ね備はるを誇らざるべからず、宜べなり二儒の新生命を此の方面に求めたること、大著『象山全集』既に公刊され、飯島忠夫氏亦た之が紹介に力められ、閑幽顯微の業益し全し矣、萬里全集出んとして未だ出でずと雖西村宇野両氏の之を表彰するあり、二大儒の學識逸事やがて天下に普きに至るなるべし。

象山の下吉田松陰の鬱然として天下の高士となれるあり、その盟友にして義兄たる勝安房の幕未維新の經世家として著はるゝあり、名士として其名天下に鳴ること久し矣、之に反して萬里の名聲獨り豐の地に盛なりと雖、その天下に著れしは事近來に屬す、帆門の十子皆な一時の俊にして毛利空桑の氣節、米良東嶠の能文、野元白巖の洽聞、岡薨谷の強識等共に南豐の隣にして又た天下の貴なりと雖もその師の大を紹介すること足らず、世人象山を説きて萬里を知らざるものあるは其故何んぞや惟ふに象山は門戸を張り、京洛に奔走し、その非命に斃れたるを却つてその聲譽を籍甚ならしめたり、萬里南豐の山中に隱居して交を天下に求めず、會々來訪の名士あるも之と交驩するを好まず、狷介自ら恃して西嶮の艸堂に老いたり、嗚呼天下に爲すあらんと欲するものは高に登りて呼ばざるべからざるか否か。

六

予は既に萬里を以て蕃山に比し象山と較りその行藏と見識とを論じたり、請ふ更に萬里を以て

比隣の育英家廣瀬淡窓と對し隣邦の豪儒龜井南溟と並べ更に彼の學統の鼻祖梅園其人と對立して、その學識と性行とを究めんと欲す、是れ必ずしも無用の事に屬せざるべけん。

萬里淡窓と時を同くして出で共に南豐の人傑としてその聲名今に傳り、共に育英に長じその門出するところ英才俊士雲の如し、されど二儒の性行學風大に異なるものあり、萬里は豪邁淡窓は謙冲、一は日出侯に寵用せられ一時藩政の改善に力めしも峻嚴果斷に過ぎて遂に門弟關蕉川等と合はず、一時京洛に去り歸りて再び合はず、西嶮に隱居せし後も門弟等を破門すること多く嚴毅方正に過ぎて坦懷人を待つる襟度を有せず而かも其家庭は圓滿清健なること能はず、その艸堂に遁れたるも一は斯邊の消息ありしに因るが如し、是れ萬里が恬澹磊落の性、その家庭の瑣事に關與するを潔とせざりしに因るものあらんも鴻儒の爲に惜むべきなり、之をかの淡窓が町家の出を以てして拮据經營、咸宜園の發展に努め、かの大成をみるに至りしに比するの育英の法、學舎の規、遠く及ばざるものあるを感せずんば非ず、然りと雖學園の繁茂、校舎の經營のみを以て教育の目的とすべきに非ず、破窓の下茅屋の内善教其化をなし得ざるに非ず、此一事を以て萬里は淡窓に劣れりとなすは大なる誤なり、唯々萬里が學校經營の才大あらざりしをいふのみ、その學力識見のことに於ては淡窓は萬里の敵に非ず、及ばざること遠し矣、夫れ萬里はその腹笥滿盈、氣識豪邁なる點に於て淡窓の師龜井南溟に酷似す、南溟の學識文才蓋し當時の覇なり、全藩儒益軒の如き及ぶべくも非ず、奇矯の性放曠の資遂に不遇に終りしと雖、鎮西第一

流たるや無論なり、斯翁正に萬里と拮抗し得べきあり、奇なるかな萬里の師梅園は謙冲靜靜なること淡窓に似、淡窓の師南溟は飄飄然萬里に類するまきに非ず、而して南溟は梅園と會晤する機を逸せしと雖心常に吾山下の赤松子を慕へり、萬里は日田の隱君子と惡しからず、その性行の相違却つて相引くものあるか否か。

萬里の博覽強記なる書齋に假臥して古今を評論し窮理を精攻するに適す、されど萬難を排し亂麻を斷つて經世家にあらず高眼低手の讀書人なり、若し萬里をして靜修退耕すること梅園の如くならしめば其造詣蓋し測るべからざりしものありしならん、惜しいかな事此に出でずして藩政に參與し學に専らなること能はず終に西嶽卿堂に不遇の晩年を送れり、思ふにこの二儒者は山林に遊び溪水に飲み古に汲み今に稽へ天を仰ぎ地に俯し宇宙の眞理を闡明すべき天職を有せしもの、然り而して梅園はやゝ理想に近き生活を送り、萬里は軌道を脱して奔走したり、一は順境を守り他は逆境に落ちたり、予は一昨春南豐二子山麓の梅園故宅に就きて所謂梅園の畫像を拜し又中津の帆足氏に行きて所謂萬里の畫像あるものを拜せり、一は端亮なる老翁衣裳を整頓して竹椅子に腰打ち掛けて一枝の梅花に對す、廣額豐頤伸眉鳳眼、一見人をして雍容高朗の醇儒を想はしむ、他は嚴毅なる巨人衣服に頓着せず一粗几に對象し一管の毛穎を執る、高額大耳修眉隆準一見人をして豪邁磊落の豪儒を思はしむ、畫すもの巧にその眞髓を傳へ得たりといふべし。

七

一昨春予の『帆足文庫』なるものを覽るや、萬里遺著を寓目し、又た萬里自筆の『醫學小補』を驟見し『巴爾麻』辭典の破本を創見し、更にその自筆の日記『天保四年日曆』なるものを通覽するを得たり。

夫れ日出は南豐の一小藩のみ而かも外様にしてその第一世は金吾秀秋の兄たる木下俊延公なり第三世俊長公は好學崇儒、かの人見鶴山を聘して文學となし、第十世俊胤公も亦た學を尊び士を愛し梅園を聘して書を購せしめたり、第十一世俊懋公は萬里を庇護して學に就かしめ、第十三世俊敦公は萬里を擢用してその經綸の才を伸べしむ、その峻嚴の改革、儉素の勵行、却つて反動を來たし、高足關蕉川の之を破壊するものありしと雖、師弟共に藩の獎學に屈むるや軌を一にす、關藩斯文を喪はず、第十五世俊程公の時藩學『致道館』の創設を見るに至り、帆門の米良東嶠、伊藤松軒等々の教授たり、當時多士濟々、鎮西の文苑として郁々たる芳香上國に及べりといふ、而してその藩學をして此に至らしめたる主動は之を萬里提唱の功に歸せざるを得ず。

八

梅園萬里の鴻儒たること既に之を叙説し盡せり、諸ふ左に少しく南豐の天地に就きて臆説を述ぶるを得んか、夫れ南豐の地たる天正の昔、大友宗麟が鹵蕘灣を利用して海外貿易のことを敢て

し鎮西の門戸、博多、薩摩、平戸を除きては指を此地に屈せざるべからず、是或は南豊文獻に一異彩を放ち得たる遠因あらんかなれども、予を以て之を見れば南豊諸藩の侯伯、崇文敬儒の明あり、當時崎陽に來航する唐船舶載書を競買耽變するもの少なからず、かの佐伯侯毛利氏、府内侯松平氏、臼杵侯稻葉氏、岡侯中川氏、杵築侯松平氏、日出侯木下氏、森侯久留島氏の如き皆然り、就中毛利侯を以て尤とす、予嘗て平戸に遊び松浦伯爵邸内樂藏堂文庫の珍籍貴本を參覽するを得たり、中に松浦靜山公が蒐集し得たる各藩藏書目錄中「佐伯侯藏書目錄」なるものあり、予之を一瞥して毛利氏の藏書多大なるに驚けり、又た「唐船持渡改書目錄」の末尾に公の自筆にて天明六年春正月毛利和泉守より借寫したる旨を明記しあるあり、この毛利和泉守ころ佐伯侯のことにて、好學崇文は蓋し佐伯藩の一特色なりしといふ、この一瑣事はまた以て南豊文獻の盛なりしを証するに足らずや。

予の南豊に遊ぶや大分の福澤文庫、杵築の梅園文庫、中津の中津圖書館なるものを參觀したり此の三者藏するところの漢籍國典はまた愛書家の一瞥に値す就中福澤文庫を然りとす、蓋し各地舊藩々校所藏の典籍にして、此一事以て往時文教の隆なるものありしを証するに足らずや嗚呼舊藩制は亡びたりと雖、其書以て傳ふべきなり、古典籍の句、古老者宿の談、訪書汲古の旅客をしてありし昔の春の盛を偲ばしむ、鎮西文獻の微すべきものある夫れ此の南豊を第一とすべきか。

●納税表彰狀寫

表彰狀

西武藏村大字富清

寺小田組二十八戸

緝陸克ク納税ノ義務ヲ竭シ成績顯著ナリ自今一層戮力以テ此美風ヲ持續スベシ爰ニ本村納税表彰規程第二條ニ依リ別紙目錄ノ金員ヲ授與シ之ヲ表彰ス

大正七年四月三十日

西武藏村長 小野元次

表彰狀

大分縣東國東郡

西武藏村

明治四十年年度以降十ヶ年度間國稅完納ノ好成绩ヲ舉ゲタルハ一般納税者ガ國民至大義務ヲ尊重スルノ念篤キト理事者ノ施設督勵其ノ宜キヲ得タル結果ニシテ其ノ美風洵ニ他ノ模範トスルニ足ル仍テ本局ノ規程ニ基キ茲ニ之ヲ表彰ス

大正六年十月三十一日

熊本稅務監督局長正五位勳四等 連 見 義 隆

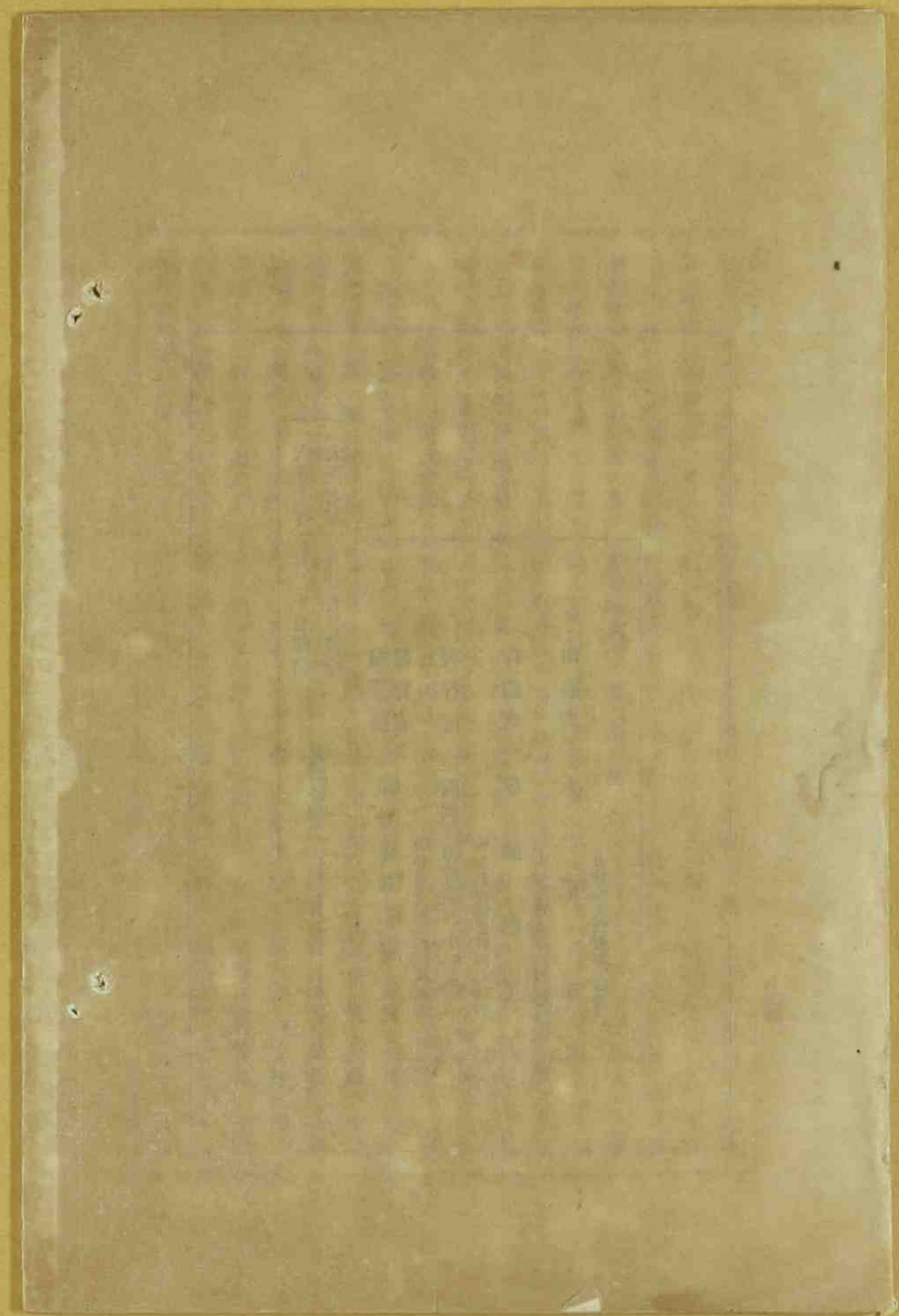
梅園祭役員氏名

委員長	小野元次	副委員長	宮本金六
理事	矢野文也	栗林與兵	三浦末吉
評議員	小田原政尾	林壯三郎	秋吉波治
	友成伊勢松	三浦壯	財前文吾
	上原安五郎	三浦昇	井上熊次
	淵上勝太郎	矢野完四郎	古庄甚策
	林長六	田邊恒太郎	田上善次郎
	植田浦吉	秋吉長次郎	清原永策
	藤原俊次	淵上久太郎	林金吾
	淵上清	林重治	山本裕
	壺井光男	竹田津猛	江原太一
以上	渡邊初次	堀口ミズエ	堀口チヨウ
			植田ナツエ

大正七年六月二十日印刷
大正七年六月廿五日發行

(非賣品)

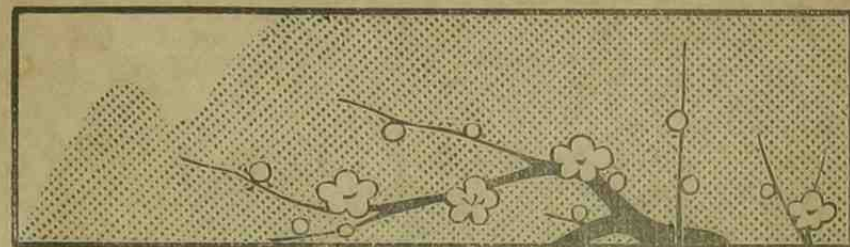
編纂兼 梅園頌德講演會
發行者 大分縣東國東郡西武藏村
發行所 西武藏尋常高等小學校
印刷者 伊藤 福重
印刷所 大正社
大分縣東國東郡東町



長崎大学附属図書館経済学部分館 武藤文庫所蔵



大正八年八月三十一日發行



梅乃可新里



梅園頌德講會
臨時號

一 梅園祭頌德講演會趣旨

三浦梅園先生ハ不世出ノ鴻儒ニシテ歿後百二十餘年ノ今日其ノ學德益光輝ヲ放チ明治四十三年本郡教育會ハ頌德會及ヒ墓前祭ヲ舉行シ同四十五年二月二十六日贈位ノ恩典アリ教育會亦タ本村民ト共ニ頌德碑ヲ建設ス梅園全集ノ發刊梅園文庫ノ設立皆ナ先生ノ頌德ヲ欽慕スルノ衷情ニ出テ遠近都鄙先生ヲ謳歌セサルモノナキニ至ル斯村ニ斯人アリ實ニ村民ノ榮譽トスル所ナリ是ニ於テ乎大正四年二月二十四日本村會ハ滿場一致ヲ以テ毎年四月三十日（先生易實日）全村民及學校ノ業ヲ休ミ知名ノ士ヲ聘シ學校ニ於テ頌德講演會ヲ開キ梅園祭ヲ舉行センコトヲ決議ス是レ村民及ヒ子弟ヲシテ永ク先生ノ德澤ニ浴スルノ恩意ヲ忘レサルト與ニ風俗人情ノ淳厚ヲ務メ處世ノ要訣志操ノ向上ヲ謀ラント欲スルニアルナリ

大正四年四月

二 梅園祭式順序

- 一、午前十時一同着席
- 一、委員長ノ先導ニヨリ齋主來賓着席
- 一、一同敬禮（風琴調節）
- 一、委員長開式ノ辭
- 一、修祓